

短 報

マナマコ稚仔にみられた  
斃死事例について

伊藤 史郎

本報告では、1992年8月にみられたマナマコの斃死事例について、被害程度としてはさほど大きくなかったものの、当センターにおける種苗生産過程で初めてみられた事例であったので、その観察結果の概要について報告する。

発症個体は、1992年4月に採卵、ふ化の後常法<sup>1)</sup>によって付着珪藻を餌料とした一次飼育を行い、同年8月から人工餌料を使った二次飼育を行っていたアオナマコにみられた。飼育は15m<sup>2</sup>水槽内にニップ網製(30目、オープニング691 $\mu$ m、2×1.5×0.5m)の生簀を設置し、餌料としてリビックW(理研ビタミン社製)を与え流水で飼育を行っていた。発症は二次飼育を行っていたアオナマコとアカナマコの飼育生簀の内、体長約20mmのアオナマコを20000尾収容し飼育を行っていた生簀内でみられた。発症が最初に確認されたのは8月31日で、水温は22.9°Cであった。発症個体は表皮がびらんし(図1)、さらに症状が進んだものは表皮が剝離し体表が白色となり斃死した。また、発症個体表皮のびらん部分には体長約50 $\mu$ mと約80 $\mu$ mの2種類の繊毛虫(図2)が多数みられ、特に約50 $\mu$ mのものが著しく多かった。発症は8月31日から9月4日にかけてみられ、斃死個体も含めた総発症個体数は2240尾であった。この間の飼育水温は22.9~25.4°Cであった。初めて発症がみられた8月31日から3日間連続して2ppmのニフルスチン酸ナトリウムで2時間の薬浴処理を行った。また、8月31日には新たな水槽に設置した新しい生簀へ稚マナマコを移し替え、さらに9月2日には分槽により飼育密度を当初の1/2にするとともに8月31日から3日間は餌止めを行い、注水量を増加し換水率を高くした。発症個体は発症の程度にかかわらず毎日取り除いた。飼育生簀の交換や飼育密度の緩和、薬浴処置後は目立った発症はみられず終息した。

発症の原因については明らかではないが、発症

がみられた生簀は他の飼育生簀に比べ飼育密度が高かった。従って1日当りの投餌量も多く、飼育生簀内には糞などが多く堆積し他の生簀に比べ汚れていた。これらのことから、高密度飼育にともなう飼育環境の悪化が発症の一つの要因であると考えられた。

近年、愛知、岡山、広島、山口、愛媛県などでも、種苗生産過程における稚マナマコや産卵誘発に使用する親マナマコなどで、今回見られたような表皮がびらんし、斃死に至る事例がみられている<sup>2)</sup>。これらのことから、今後、種苗生産の事業化にともないマナマコ種苗生産における病害防除についても検討していく必要がある。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、御指導いただいた南西海区水産研究所浜口昌巳博士に深く感謝します。

文 献

- 1) 伊藤史郎・川原逸朗(1993): マナマコの付着珪藻板飼育による大量生産(予報). 佐賀県栽培漁業センター研究報告, 2, 1-11.
- 2) 浜口昌巳(私信)

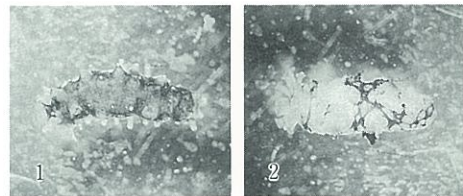


図1 稚マナマコの正常個体と発症個体  
1, 正常個体; 2, 発症個体.

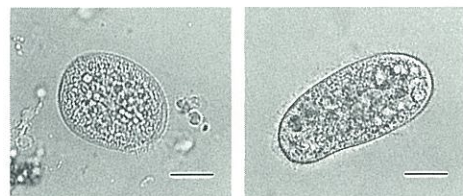


図2 発症個体表皮にみられた繊毛虫  
Scale bars=20  $\mu$ m

